



KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

June 2014

vol. 15

「教える」を超えた「学ぶ」を探して

教育推進部 准教授 森 朋子

2014年4月に教育推進部に着任しました森朋子です。専門は教育学、社会学、心理学、認知科学などの学際分野で、さまざまな場面で生じる学びの構造・プロセスを考える学習研究です。そこでの知見を活かし、本学の教育改革にも携わってまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

日本の教育システムでは、「教える」を通じて「学ぶ」経験が多いと言われています。つまり教師が学校で教え、宿題を出す、課題を出す、指示をする等を受けて、初めて子ども達は「学ぶ」に取り組みます。「教える」ことではじめて「学ぶ」のスイッチが入るといっても過言ではないでしょう。小中高とそのような学習経験を積み重ねてきた後に、大学に入学し、学生はいきなり主体的に学ぶことが期待されます。「学ぶ」から始まる学習経験が少ない学生は、誰からの指示を受けなくても自らの学びを積み上げていくことに、戸惑っている場合も少なくありません。

そもそも「学ぶ」は「教える」よりもっと広い概念であり、人は発達として学ぶ、生涯学習として学ぶ、学校外の家庭や企業・組織で学ぶなど、「教える」のスイッチがなくても模倣などからスタートして共同体の中で他者とかかわりながら学んでい

きます。さらに社会においては、「教える」機会が減りながらも、より深く、主体的な「学ぶ」が求められることを考えれば、小中高の学校での学習経験を転換し、「教える」を通じなくても主体的に「学ぶ」に取り組む人材を育成することは、学習のトランジションの観点からも大学教育の重要な役割になりました。

学習研究において、深い学習には、躊躇や葛藤、戸惑い、疑問や発見という複雑な心理状況を伴う思考のプロセスが必要と言われています。授業において、学生のそのような状況をどうやったら多く引き出せるのかといえば、一番に思いつくのは同レベルの他者、つまり学生同士の学びあいです。授業でも授業外でも、「えっ、それはなんで?」「どうしてそうなるの?」を気軽に引き出し、いろんな考え方を吟味できる学習環境をどのように作っていくかがとても重要です。学生が「教える」を通さない「学ぶ」をどれだけ大学生活で体験できるのか、また学生のこのような活動を「教える」でどのようにサポートしていくのか、主体性という意味を考えながら、個人としても大学教育改革としても、引き続き検討してまいります。